

PROGRAM

カルロス・ガルシア＝トルサ:ワルツ(君を想って)

Carlos García Tolsa:Waltzes (Pienso en ti)

フェデリコ・モレノ＝トロバ:組曲「スペインの城」

Federico Moreno Torroba:Castillos de España

No.1	Alcázar de Segovia	召集
No.2	Alba de Tormes	吟遊詩人の歌
No.3	Zafra	幽霊
No.4	Montemayor	静思(松のロマンス)
No.5	Manzanares del Real	美しい乙女に
No.6	Sigüenza	王女は眠る
No.7	Turégano	山唄
No.8	Torija	悲歌
No.9	Simancas	放浪楽士の歌
No.10	Calatrava	祭りの調べ
No.11	Javier	魂の呼びさまし
No.12	Alcañiz	祭りの調べ
No.13	Redaba	
No.14	Olite	



ベネデット・マルチェッロ(編曲/D.ラッセル):ソナタ

Benedetto Marcello(arr. David Russel):Sonata

- I. Adagio
- II. Allegro
- III. Largo
- IV. Allegro

レヒーノ・サインス・デ・ラ・マーサ

Regino Sáinz de la Maza

ロンデーニャ

Rondeña

イディリオ

Idilio

サパテアード

Zapateado

ガブリエル・エスタレージャス
チャールズ・チャップリン讃歌より

Gabriel Estarellas:Homenaje a Charles Chaplin

No.8	Sueños	夢
No.6	Bastón	ステッキ
No.18	Blanco y Negro	白と黒
No.13	Añoranza	郷愁
No.14	Botas	ドタ靴
No.16	Tramoyista	道具方

PROGRAM NOTES

スペインに生を享け後半生はウルグアイで過ごした**カルロス・ガルシア＝トルサ**(1858～1905)は、名曲《アルハンブラの想い出》を作曲したフランシスコ・タレガと同世代にあたるギタリストで、タレガにも影響を与えた巨匠フリアン・アルカスに師事した。マズルカ、ポルカ、ワルツなど、おもに舞曲形式のギター独奏曲を残しており、孫弟子にあたるアグスティン・バリオスや、若き日のヴィラ＝ロボスが演奏会で取り上げた記録も残っている。今回演奏される《**君を想って**》は、序奏と4つのワルツ、コーダからなる、ギター作品としては規模の大きなハ長調のワルツ。

“ギターの神様”アンドレス・セゴビアとの親交から多数のギター作品を残した**フェデリコ・モレノ＝トロバ**(1891～1982)の名は、スペイン音楽史上では、伝統的な音楽劇「サルスエラ」を20世紀において支えた重要な作曲家として記憶されている。そうしたキャリアの影響もあってか、同時代の作曲家と異なり前衛的な作曲技法には関心を示さず、手がけた作品はいずれも親しみやすく味わい深いものばかりである。

すでに作曲家としての地位を確立していた晩年のトロバが作曲した《**スペインの城**》は、ディズニー映画『白雪姫』でモデルになったとされる「アルカサル・デ・セゴビア」や、フランシスコ・ザビエルが生誕した「ハビエル城」など、実在する“スペインの城”をテーマにした全14曲の組曲(演奏順は奏者に委ねられている)。感傷的なメロディが美しい「トリーハ」や明るく澆刺とした「トゥレガノ」、心に染み入る響きの「モンテマヨール」(松のロマンス)など、人気曲が単独や抜粋で演奏されることはしばしばあるものの、全曲録音はラッセルによるトロバ作品集

CD(1996)が世界初で、全曲実演となるときわめてめずらしい。ギター音楽の書法を熟知した大家のスペインの薫り高い名作を、ぜひじっくりお楽しみいただきたい。

貴族の家系に生まれ公職にも就いていた**ベネデット・マルチェッロ**(1686～1739)はヴェネツィアで活躍したイタリアの作曲家で、同郷のアントニオ・ヴィヴァルディとほぼ同世代にあたる。兄アレックスandroも作曲家で《オーボエ協奏曲 二短調》(ベニスの愛)が有名だが、弟のベネデットは教会音楽、オラトリオやカンタータ、管弦楽から器楽曲まで多岐にわたる膨大な数の作品を残し、生前は兄をしのぐ活躍をみせていたと考えられる。

全12曲からなる《**リコーダーと通奏低音のためのソナタ集**》Op.2は1712年にヴェネツィアで出版された作品で、現在もリコーダーやフルートのレパートリーとして定着している。ヘ長調(ラッセルは半音下のホ長調に編曲)の第1番は、付点で紡がれる優美なアダージョ、名人芸的なパッセージを繰り出すアレグロ、歌曲風な短いラルゴ、12/8拍子で田舎風の踊りを想起させるアレグロの全4楽章からなる。

《アランフェス協奏曲》の初演者として知られる**レヒーノ・サインス・デ・ラ・マーサ**(1896～1981)は、長年にわたりマドリッド音楽院のギター科教授を務め、「ギターの国スペイン」でこの楽器の発展のために重役を担った。同じくギタリストであった弟エドゥアルドが作曲活動で功績を残したのに対し、兄レヒーノは演奏や教授活動で高評を得たが、作曲したギター作品の人気も高く、現在も取り上げられる機会は少なくない。

代表作といえる《**ロンデーニャ**》は、アンダルシアの山間の町「ロンダ」を起源とするカンテ・フラメンコ

の一種で、この曲では、小気味よいリズムを刻むトケ(ギター)と哀愁をさそうカンテ(歌)を一人二役で奏する。甘美なメロディを聴かせる小品《**イディリオ**》は、自身が音楽を担当した1965年のスペイン映画『ラ・フロンテーラ・デ・ディオス』(神の境界)のうちの1曲で、タイトルは牧歌的な恋愛詩を意味する。《**サパテアード**》はアンダルシア発祥のフラメンコ舞踊で、足で床を踏み鳴らす特徴的なリズム(パソ)を軽快に聴かせる。

ガブリエル・エスタレージャス(1952～)は、ラッセルと同世代にあたるスペインのギタリスト。タレガ国際ほか複数のギターコンクールで優勝後、国内外のフェスティバルへの出演やオーケストラとの共演、ルイス・デ・パブロやアントン・ガルシア・アブ rilルといった自国の名だたる作曲家たちの新作ギター作品を多数初演するなど、演奏家としてめざましい活躍を続けてきた。また、マドリッド王立音楽院ギター科教授を務めるかたわら作曲活動もしており、2020年以降は特にその数を増やしている。

2015年に書かれた《**チャールズ・チャップリン讃歌**》は、歴史的な映画作家・俳優であると同時に、後世に残るテーマ曲をみずから手がけるほどすぐれた作曲家でもあった“喜劇王”チャールズ・チャップリンをたたえた、全20曲からなる1時間超えの大作。今回は以下の6曲が抜粋して演奏される。幻想的なアルペジオが続く主部と叙情的な中間部が好対照な第8曲「**夢**」、変則的なリズムが謎めいた雰囲気醸し出す第6曲「**ステッキ**」、ロック調のモチーフが断続的に現れる第18曲「**白と黒**」、劇伴のような情緒あふれるメロディを聴かせる第13曲「**郷愁**」、コミカルでどこか愛らしい第14曲「**ドタ靴**」、低音弦を重厚に響かせる第16曲「**道具方**」。